

は じ め に

長崎県教育委員会は、21世紀の郷土を担う人づくりの課題として、「困難にくじけない強さと人を思いやる優しさを持ち、夢の実現のために粘り強く努力する子ども」の育成を掲げ、学校・家庭・地域社会が一体となって各種の取り組みを進めています。

県教育センターにおいても、そのような教育課題に呼応して研修講座や調査研究の充実を図っているところです。

この度、昨年から手がけた「長崎県児童生徒の社会性・規範意識に関する調査研究」の結果を報告書としてまとめました。そして、その分析結果に基づき、学校・家庭・地域社会に向けて「10のメッセージ」を発信することといたしました。

近年の青少年の傾向として、少子化が進む中で、自然体験や社会体験の乏しさからくる自立性や協調性の欠如、自己中心的なものの見方や考え方、公共的なものや社会的なものへの関心の低下などが言われています。また、基本的生活習慣の欠如、規範意識の低下が指摘されています。そして、夢を持ち、その実現に向けて自ら考え、主体的に課題に取り組む意欲や態度の欠如も憂慮されています。

このようなことに関して、長崎県の児童生徒の生活や意識の実態は果たしてどのような状況にあるのか。その基礎資料を得るために、小学校5年生、中学校2年生、高等学校2年生、それぞれ約1000名ずつとその保護者、調査実施校の教員約1000名、合計約7000名に対するアンケートを実施しました。規範意識の実態を中心に、その背景となる家庭生活、学校生活、社会生活等に関して幅広く質問し、分析に当たっては、豊かな社会性と確かな規範意識を培うために、学校、家庭、地域社会の在り方としてどのようなことが大切かという視点で臨みました。その結果、これまで大切であると言われてきたことを改めて確認できたようです。そのことを「10のメッセージ」としてまとめています。

今回の調査は、21世紀最初の年の意識調査です。今後定期的に同じ調査を実施することにより、ここを起点としてどのように変化するかを検証していきたいと考えています。

「ココロねっこ運動」や「タフな子どもを育むための実践モデル事業」をはじめ、学校教育、家庭教育、社会教育の様々な取り組みに「10のメッセージ」を活かし、次回の調査では、豊かな社会性と確かな規範意識を身につけた「たくましいながさきの子どもたち」が更に増えるよう努めたいと存じます。

平成14年11月

長崎県教育センター所長
寺 田 隆 士